

カール・メンガー文庫についての覚え書

岡崎 義 富

経済学者、Carl Menger (1840. 2. 23-1921. 2. 21)が収集した優れた文庫が一橋大学に所蔵されていることは、国内において多くの人々によって紹介され、また国外においてもMITのC. P. Kindleberger 教授によって1975年の国際経済学会の総会において発表されるなど周知の事実である。この文庫の内容を解説する用意も、又その力もない。内容の理解には、不備な点はあるとしても既に刊行されている同文庫の目録を参照することが最善の方法であることはいうまでもない。体験的に一言つけ加えさせてもらえるなら、筆者の一橋大学における図書館員としての仕事のなかで、資料の重複調査にかけた時間は決して少なくはなかった。その調査の過程で、ここぞというときカード目録の間に確実に特徴のあるメンガー文庫のカードが挿入されているのである。度重なるこの経験は筆者の文庫に対する評価と畏敬の念を心のなかにますます高く積み上げて行った。筆者は最近(1980・10)一橋大学から去ることとなった。永い勤務の期間中、メンガー文庫を熱心に利用された方々との接触は無数である。ここでは、個別の資料とは別に、メンガー研究又は文庫全体としての興味において文庫をみた人々の印象と、その人達との接触の過程でわかってきた一橋にないメンガーの資料について、冗漫であるが館員の参考業務の一つの記録として書き留めておきたい。

1

1980年の春、桜前線の北上が伝えられる頃、筆者の仕事の上からは普段あまり接触のない長崎大学工学部から電話を受けた。同学部の砂本順三教授からのもので電話の内容はC. メンガー教授のお孫さんが来邦中である、一橋大学に所蔵されている祖父の文庫をこの機会に見学したいとの希望があるが可能であろうかとの問い合わせであった。お断りする理由はまったく無い。歓迎の意を伝えると東京での日程が決定次第連絡するとのことであった。

メンガー文庫を保管している一橋大学の社会科学古典資料センターがF. M.メンガー夫妻の訪問を受けたのは、その4月24日のことである。いかにも若いアメリカの学者らしくジーンズのスーツといういでたちであった。一橋大学の歴史などを質問され、立ち合われた大川政三教授の説明に耳を傾けられる、そのメモを取る夫人の様子はまだアメリカ南部の女子学生とってよい程の初々しさがあった。F. M. メンガー教授は、現在アトランタのエモリー大学で化学の教鞭をとっておられ、日本の数箇所の大学で専門分野の講演を行う予定になっていて、その日程の合間を縫っての来訪であった。メンガー文庫の書架にはC. メンガー教授のデスマスクが保管されている。それをみて、少しおどけた調子で近寄って、それに似ているかどうかを夫人に質問された。夫人はそのマスクを気味悪がって近寄らなかったが、いつの日か年輪がこの若い科学者の顔に刻まれるなら、だれも似ていることを否定することはできないだろう。後述のカウダー教授の言によるとこのデスマスクははなはだ「ピースフル」なのであるが。

こちらで用意した祖父メンガー教授及びその資料についての質問に対して即答を得ることはできなかった。アメリカ生れの夫妻にとっては一橋大学に保管されている祖父メンガー教授の書斎(ウィーン)の写真も、大塚金之助、渡辺大輔、金子鷹之助の各先生と一緒に写っているC. メンガー夫人のそれもはじめてみるものであった。ウィーンのC. メンガー教授は兩人にとって既に遠い存在であるように思われた。しかし祖父についてわかることは帰国後報告すると約束してくれた。

メンガー文庫の導入を語るとき引用される資料の一つに「メンガー文庫非常によければ苦面しても買いたし…」とする佐野善作学長の岩田新先生への電報がある(1922.6.21)。これをうけてドイツ留学中の大塚金之助先生等の入手の活動が同年7月-10月にかけて行われるのである。そして「メンガー文庫購入に関するベルリン留学生よりの報告」によると令息の勉強のため自然科学と哲学(4棚)をさしひいたとあり, 引取りに際して外された部分がある。更にこのことについては、1957年に大塚先生が「カール・メンガー文庫の思い出」(NDL『読書春秋』第8巻10号)のなかで“わたしたちは、文庫を丹念に調べた。その文庫のうち、文芸関係のものは、メンガー教授の遺言によってメンガー夫人に、自然科学や哲学関係の大部分は、同様に令息カール(Karlでメンガー教授とはCとKとのちがいがあある)に遺贈され、その残り全部(カード箱、肖像、マスク、議義用のメモ・カード等々)がゆずり渡される”と述べておられる。この除外された部分、特に哲学の部分は、いったい何処に現在納まっているのであろうかとの質問は筆者の再三受けた質問である。

メンガーの家族は、その後、1930年代の後半にアメリカに移り、1942年には帰化している。令息K. メンガーは数学の教授(シカゴ大学)となって教鞭をとることとなった。このK. メンガー教授は1931年に一度一橋大学を訪問されている。米国からウイーンへの途中で、新築されたばかりの国立のキャンパスの新図書館に保存された父の文庫をみているのである。そして、1959年の6月になって、夏期の講義を受けもっていたブリティッシュ・コロンビア大学から自分の所有しているメンガー文庫の哲学の部分を譲渡する意志があり、その申し入れをする文書を一橋大学に送っている。文面によると、父の探求書のリスト(後出の書籍購入控帳の哲学の部門と思われる)をもとに、補充と拡張に努力し、稀覯本に属するベール、ボルツァーノ、ガッサンディ、ゲーリンクス及びユエなどの全集を加え、その量は幅にして約100m位、特に英、独、仏語による1600年以降出版の重要哲学書があつめられているとのことで、当時の譲渡の価格は9千ドルであるとしている。手放す理由は、数度の引越にもうたえられない、父のものをまとめておきたいなどであった。重複する資料も多く、また資金の関係もあってか、この資料の購入は残念ながら見送られてしまったのである。

その後、この哲学の部分の行方が問題となったのは、限界効用学説史の研究者であるエミール・カウダー教授の来学であった。カントの散歩の時間は時計のごとく正確であったという話は子どものころよく聞かされた。これは古風なドイツの学者の一般的属性ではないかと思いたったのは一橋で過したカウダー教授の研究態度をみてからである。ベルリン大学の博士号をもち、当時イリノイのウエスレイアン大学経済学部長の肩書をもつこの学者が最初に一橋に来たのは1958年のことである。これに続く第2回目の訪問は1960年9月6日から1961年3月31日横浜をオルソパ号で発つまでの7箇月に及ぶ、夫人と娘、息子の家族全員での長期滞在であった。この期間、毎朝正確に9時1分前に図書館に現われ、12時1分前に昼食に退室し、1時1分前に現われ、夕方5時1分前には通路の扉が開いて、秀でた額と、背丈はさして日本人とかわらないが優れてガッシリとした切り株のような体軀がそこに現われるのが常であった。そして明日の来館をつげ、ときとしては、その日の研究や調査の結果についてふたことみこと報告してくれることもあった。教授には作業の期間一室が与えられた。愛煙家であったため、その室は特別にOKということにされ、タイプライターの音のないときは、米国から空輸の紫煙の香りがただよった。タバコは吸わぬがよい、吸うならパイプにせよ、シガレットは癌になる可能性が強い、フランスに多分バルセロナあたりで作られたシガレットが入るのは19世紀の初期であるから、ナポレオンはフランスでシガレットを吸った最初の一人であろう、…ウォーター・ローリーによるヴァージニ

ア植民地からイギリスへのタバコの導入、ニューヨーク公共図書館に所蔵されているタバコ文献のコレクションの話など、紫煙の拡散にしたがって話題の拡がりもその行方をしらないようであった。教授の借家は国立の東区にあり、居間には1ダース程のパイプが掛けてあり、毎日のパイプがそのなかから選ばれた。記憶を呼び起す教授の表情はまた独特で、全身を緊張させる、充血が顔に表われるころ古い数字などが口について出るといった有様であった。夫人は語学に堪能で数箇国語（英、独、仏、スペイン、イタリー、ラテン）を理解した。教授の言によると引用個所の発見などは夫人の力を借りの方が早いとのことである。夫人はときどき教授の室に現われ、渡辺金一教授の力を借りてCorpus. Juris civilis のページをめくっていた。夫人の趣味は何かとの答に哲学とあったのは筆者にとって大変印象的であった。

4

カウダー教授の最初の訪問における課題は①C. メンガーの哲学的背景、②いわゆるメンガーの剽窃説の問題、③オーストリー学派のルーツなどの側面の調査で、第2回目の本格的な調査の段階では、①初期及び同時代の経済学者との関係、②『社会科学方法論（Untersuchungen, 1883）』に先行する社会哲学の存在、③『経済学原理（Grundsätze, 1871）』以前の価値、価格、貨幣についてのメンガーの概念、④経済理論の多くの側面で未完成な諸思想の探索などで、それぞれについて成果を上げられた。この調査の過程で、メンガー文庫の資料に無数にみられるメンガー自身による書き込みが調査された。特に重要と思われる書き込みについては一橋大学の要請によって全面解読がなされた。それはメンガーの『経済学原理』（Mon. 2142）と、K. H. ラウの『経済学原理 第1巻』（第7版 1863 Comp. 266）へのメンガー自身による書き込みである。カウダー教授は重要な個所のみとの意見をもたれていたが大学の要請で全部解読され、それぞれCarl Mengers Zusätze zu “Grundsätze der Volkswirtschaftslehre”, 1961及びCarl Mengers erster Entwurf zu seinem Hauptwerk “Grundsätze” geschrieben als Anmerkungen zu den “Grundsätzen der Volkswirtschaftslehre” von Karl Heinrich Rau, 1961として印刷（mimeograph）された。前者は、メンガーが改訂の意図をもって全面に書き込みをした重要資料である。後者については、その解説で山田雄三教授が次のように述べられている。K. メンガーが編集して発行した『経済学原理』第2版「編集者序文」の指摘するところによると、C. メンガーは経済学的文献を収集しながら「覚え書」なるものを『原理』の刊行の数年前から書き残している、“こんど一つの貴重な資料が確認されることとなった。メンガー令息は「覚え書」の箇処でこの「覚え書」がどういう形のものかについて何ら説明を与えていない。ところで、一橋大学図書館が所蔵する「メンガー文庫」のなかの一冊カール・ハインリヒ・ラウKarl Heinrich RauのLehrbuch der politischen Oekonomie, Bd. 1: Grundsätze der Volkswirtschaftslehre, 7. Ausg., Leipzig 1863という書物に、メンガー自身による極めて豊富な書き込みがあって、そこにしるされた日付けによって、それが1867年の秋から書きはじめられたことが明確なのである、ただしそれが直ちにメンガー令息のいう「覚え書」そのものかどうかは断定し難く、この資料には「1868年」という日付けは見当らない。しかし、少なくともそれが「1867年」にはじまるメンガーの経済学への没頭に際して書かれたものの一つであり、われわれのメンガー研究にとって極めて貴重な資料であることは疑いない。

メンガー令息のいう「覚え書」はこれを含んでいたものを指すかも知れず、もしそうだとすれば令息および彼を囲むウィーンの経済学者たちには既に知られていた資料であろう。しかし、いまこの資料が公刊されるにいたったのはエミール・カウダーEmil Kauder博士の努力によるのである。…カウダー博士はこの資料をメンガーのGrundsätzeの「最初の草稿」と呼んでいる。”これらの書き込みをカウダー博士はメンガリアーナと呼んだ。

当然ながら文庫中に見出される書き込みの発掘過程で、『社会科学方法論 (Untersuchungen) 1883』もカウダー教授によってチェックされた。文庫中にはこれは3コピー収録されているにもかかわらず、何の書き込みも発見されなかった。

哲学書の行方の問題がメンガーの哲学的背景を探求する必須のものであったので、彼の哲学書にも当然あるものと予想される書き込みが調査の対象とならざるをえない。先年購入を見送ったK.メンガーの所有する文庫について、カウダー教授は友人を通してその後の情報を得ることとした。1960年12月カウダー教授にもたらされた回答は、1年位以前にモントリオール大学に売却されたようで、それ以上の(書き込みの有無等)調査は残念ながらできないとのことであった。

筆者は、後年モントリオール大学の図書館に冊子目録があるなら寄贈して欲しいとの依頼をしたことがある。受けとった返事には、冊子目録は存在しない、この文庫は独立して保存されているわけではない、哲学と神学の分類に統合されている、トレースできないわけではないが非常に時間のかかる仕事であるとのことであった。一般書のなかに埋没しているわけで、今のところ、K.メンガー教授が文庫の提供を申し出たときの簡単なリスト以外にこの部分の内容を知る手がかりはない。

カウダー教授の研究成果はいくつかの論文としてその都度発表された。そのまとめとして1965年にはA History of Marginal Utility Theory, Princeton が上梓された。(限界効用理論の歴史、斧田好雄訳、嵯峨野書院、1979)この書物の末尾に<現存するが利用不可能な書物、小冊子、その他の資料>が次のようにあげられている。

1867年の価値論における覚え書、ハイエクがC.メンガーのロンドン版の選集(1934)の注で言及している覚え書が(ラウ『経済学原論 第1巻』)への書き込みと同じであるか否か見いだし得なかった。

『原理』の第2版へむけられた序文、一部はCarl Menger, Grundsätze der Volkswirtschaftslehre, 2nd posthumous ed. viiff : Wien, 1923において出版。Preface by Richard Schüller, ed. Karl Menger (息子) (略してSch. M.) pp. viiff.

Carl Menger's paper "Kritik von Wundts Logik," (Sch. M.) p. xiii カール・メンガー(Karl Menger)がもっているのでは?

カール・メンガーとボエーム-バヴェルクとの文通。一部はSch. M xii および Economisk Tidskrift Upsala, 1921, pp. 87ff. にて出版

Sch. M の最初の草稿。カール・メンガー(Karl Menger)の所有か?

私はその他の貴重な掘り出しものを見つけだせなかった。メンガーの継承者の文書、書簡や未公開の原稿の捜査は殆んど完全に失敗した。ただウェスリー・C・ミッチェル宛の若きフリードリッヒ・フォン・ハイエクの書簡だけはコロンビア大学のセリグマン室に保管されているのをつきとめることが出来た。(斧田訳)

カウダー教授は一橋を去った後はフロリダのセント・ピーターズバーグにあるフロリダプレゼビテリアン大学に職を移された。時間がゆるすなら、前述と同様の作業をして欲しい旨の一橋大学の意志を伝え、書き込みの多量にある文庫中のミルの『原論』独訳本(Soetbeer, 1864)のマイクロフィルムがお別れに際して手渡されている。カウダー教授の生年は1900年である。お年とこの細密な仕事は今の状態でどうかと案ずるのである。

まもなく『社会科学方法論』で発見することのできなかった書き込みの問題について解決の鍵がある機会に訪れたのである。F. A. ハイエク教授が一橋大学を訪問されたのは1964年4月15日のことである。メンガー文庫を見学され、賛辞を惜しまなかった。当然カウダー教授の仕事に話

が及んだとき、自分の所有する『方法論』1883にはメンガーの書き込みがあるといわれるではないか。カウダー教授がストレンジ！を連発した問題は解決した。この一本はC. メンガー夫人から貰ったものであるとのこと、帰ってからこの書き込みの部分をカウダー教授の方式でトランスクリプトして送付するから保存しておくようにとの申し出をされた。すぐにこの約束は実行され、数ページであるが送付してくれた。ハイエク教授の手紙と一緒に保存されている➤

C. メンガー『経済学原理』初版の出版百年を記念して、1971年、ウィーンでシンポジウムが開催された。その成果はCarl Menger and the Austrian School of Economics, ed. by J. R. Hicks and W. Weber, Oxford, 1973として刊行された。この論文集のなかでハイエク教授はラウの『原論』にある書き込みは、カウダー教授の編集した書き込み解説本のタイトルにみられるGrundsätzeの「最初の草稿」とはいいがたいとしている。また注目すべきは、同書のK.メンガー教授の論文の脚注である。＜私は1867～8の日付をもつ約20冊の一連のノートブックを所有している、これには価値論について彼（C. メンガー）の最初の思考輪郭が散在している経済の古典からの抜粋が含まれている＞というもので、山田雄三教授の「覚え書」にみる問題点とカウダー教授の利用不可能な資料について一つの回答であった。

6

一橋大学が東京商科大学と名乗った時代、英訳されると最後のCommerceを見落されて、東京大学と間違えられ手紙が誤配されたことは2度や3度ではない。今度は正真正銘、東京大学附属図書館長宛の手紙が転送されてきた。それはジョーンズ・ホプキンス大学M. S. アイゼンハウワ－図書館の特殊文庫担当図書館員ミス・キャロライン・スミスの1974年11月8日付の手紙である。彼女の手紙によると、C. メンガーが70歳の誕生日に彼に送られた経済学者の署名入り写真のコレクションがある、貴大学はメンガー文庫を購入したので、メンガーの個人的な文書をも保存しているのなら、C. メンガーに1910年写真を送った経済学者のリストがそのなかにないであろうか、あれば署名の同定に役立つのであるが、という文面のものである。カウダー教授の著書の最終ページには以下のような文章がある。＜私はこの調査を終える前に、フリッツ・マクループ教授が私の注意をうながしてくれた一つの珍しい収藏品について述べなければならない。メンガーは70歳の誕生日に、全地球上の経済学者はおのおの写真をとるべきである、そしてその1枚を自分に送って欲しいとの要請をした。グスタフ・シュモラーとルジヨ・ブレンターノ以外のすべての人はそうした…ジョーンズ・ホプキンス大学にはこれらの収藏品が保管されている＞というものである。この手紙は正にここにいう資料の同定のための問い合わせであった。一橋大学にそれに役立つ資料があるだろうか。最初に引用した大塚教授の残り全部のカッコ書きの内容は『メンガー文庫目録第2巻』の巻頭に示されている。

カール・メンガー文庫蔵品目録

- | | |
|---|----|
| 1. メンガー教授デス・マスク | 1個 |
| 2. 肖像画 | 3枚 |
| a. メンガー教授の写真銅板（1903年教授が63歳のときのもの） | |
| b. メンガー教授の肖像画（エッチング）（年次不詳、F. Schmutzer 作） | |
| c. メンガー教授の肖像画（エッチング）（1915年教授が75歳のときのもの） | |
| 3. 諸控帳 | |
| a. メンガー教授の書籍購入控帳（National-Oekonomie） | 1冊 |
| b. メンガー教授の書籍購入控帳（Geographie u. Reisen） | 1冊 |
| c. メンガー教授の書籍購入控帳（Rechtswissenschaft） | 1冊 |
| d. 帳簿（Inventurの標題あり。貸借関係等の記入あり） | 2冊 |

4. カード目録

メンガー使用の書籍カード目録 (19×21cm.) 約2万枚

5. 書簡

メンガー教授に宛てた書簡多数。

ここには、どこにもそのようなリストらしきものが含まれているところはない。念のため5.書簡(葉書等を含め97件)について発信人のリストを参考までに送り、K.メンガー教授に問い合わせたらどうかと書き添えて、できるなら、その資料の入手経路をこちらでは知りたいとの質問をした。翌年(1975)の2月、ミス・スミスからの返事を受けとった。文面は次のようなものである。われわれの所蔵するこの経済学者の写真のコレクションは228枚であり、C.メンガー夫人からの寄贈である。残念ながら寄贈の日付等の記録がないとのことであった。同年の5月、ワルラスの書簡集を編集中的W.ジャッフェ教授からワルラスからメンガーへの手紙はないかとの問い合わせがあった。これも所蔵されてはいない。

7.

1979年11月3日、一橋大学において一橋祭運営委員会の主催するポール・M.スウィージー先生の「経済学-80年代の弁証法的分析」と題する講演会が開催された。講演の前の時間を割いてシュンペーター文庫、メンガー文庫を見学されたが、書架の前に立ち止る時間がながくなって講演の開始が遅れるのではないかと心配したほどである。「自分はメンガーのメダルをもっている、記念にさしあげる」との約束をされた。翌年の春、一橋大学の講師をされているH. B. ピックス先生が赴任の際スウィージー先生の依頼としてこのメダルを届けてくれた。このメダルはメンガー-80歳の記念のものである。メンガーの面影を思ふものが、前述の肖像画などの外に一つ一橋大学に加わったことになる。ウィーン大学には中庭を囲むコリドールがある。その壁面にはメンガーを始めとするウィーザー、ポエム-バヴェルクのレリーフが美しくはめ込まれていたのを思い出す。C.メンガーはIsmar Feilbogen への手紙で、有能な弁護士であった彼の父が4000冊程の蔵書を残したと、多くは法律の図書であったが、歴史・経済の著作も多く10歳に及ばぬ兄弟は、子供達が冒険物語りや切手の収集に心を寄せる年に、モンテスキュー、スミス、J. B. セイ、L. セイ、リカード…の著作のページを興味をもってめくった。…図書は25000に達し、経済学のコレクションとしては最も完全なものと思う…と語っている。はなはだ非凡な学者の成長がうかがわれる。一方、残されている帳簿(3.d.)をみると靴を買った記録など、また本にはさまれたままの鉛筆(カウダー博士の話しでは当時の著名なメーカーのもの)などがあって人間くさいメンガー教授が浮び上ってくるような気がして興味深い。

8.

メンガー文庫にはマルサスの『人口論』の初版がない、仏訳の2版があるだけである(一橋大の貴重書分類には初版の優れたコピーをはじめ6版までであることを付記しておく)。これは他の古典学派の著作の収集状況に比較してみると少し奇異である。1980年7月、なんと東京大学の大河内暁男教授が『東大経済学部のカール・メンガー旧蔵書』(経済学論集46-2 1980.7)と題する報告を発表された。同学部には80冊のメンガーの旧蔵書があるとのこと、それをみるとやはりマルサスの『人口論』は初版から6版まで揃っているのである。これら80冊の受入れの日は大正13年3月31日であるとのことである。リストをみると80冊の著作はJ. Andersonの著作からA. Youngにいたるまで拡がっている。輸送の途中1箱分のみはずれたものといった状態ではない、大河内教授は収集経路についていくつかの可能性を示唆しているが明確とはいえない。これまた疑問の一つとして残されるものである。

岡山大学の八木紀一郎先生が現在メンガーの研究を熱心に進められている。最近先生から与え

られた情報によると岡山大学の黒正巖文庫にメンガーの経済学の講義ノートがあるということである。またウイーン大学にも財政学と国民経済学のものがあるとのことで、機会を得たら一度拝見したいと思っている。これも一橋ではいままで知られていないことであった。

1980年5月18日、F. M. メンガー教授からお礼の手紙を受けとった。ジョーンズ・ホプキンス大学にある写真のコレクションは1950年代の後半に寄贈されたものである。父は祖父のLiterary estateを所有している、最善の方法は父と直接コンタクトすることであると簡単な回答が付されていた。(K. メンガー教授については通常の信書などでは返事のいただけない方であることを付記しておく。)

9

メンガー文庫に所蔵されていないメンガーの資料について少しずつ他所での存在がわかってきている。だからといってメンガー文庫の価値は少しもかわらないだろう。むしろまだ、その真価は正当に評価されていないのではないと思われる。メンガー文庫『目録1』は極めて短期間に作成されている。書誌類もまったく揃っていないといってよい当時これを目録化した若い研究者の能力に敬意を表するものであるが、現在の目録の基準からすると不足の点が少なくない。世界に数冊しか存在が明らかでない図書もふくまれているが、校合には目録情報としていまのままでは不足である。例えばGedanken vom Gelde und von der Handlung, Wien, 1758 はJohn Lawの翻訳であり、甚だ貴重なものでvariantがある可能性があるが、現在の目録ではこの資料は利用しにくい。再目録の作業を行うことはその値打が確実にあると考えられるが、流入する資料に押し倒されそうな一橋大学の日常ではなかなか許されぬ仕事であろう。

金子鷹之助先生の佐野学長宛の1922年9月9日の手紙をみると「壞太利ノ政府ヤ大学ガメンガー文庫ノ喪失に対シ反感ヲ有シテ居ル事トウキンナニ於ケル社会状態ガ伯林ヨリモ遥カニ不穏ダカラデアリマス…」とある、当時の外国貨幣の取締強化の許で3万ドルの支払いの手順等々、あわただしさと緊張感がよく伝わってくる。いくつかの資料も外に流れ出たことも想像できないことではない。一橋大学の経済学部的美濃口武雄教授から、最近杉村廣蔵先生の『カール・メンガーの生涯及び思想』(経済学方法史, 理想社 1938)のコピーをいただいた。そのなかに…彼(メンガー)は釣に関する文献をあつめたという…行がある。どうも一橋大学にはみあたらないメンガー文庫の核を離れた小さな惑星が世界中をぐるぐる廻っていることであろう。

(メンガー文庫の入手について詳細な資料の必要な方は一橋大学附属図書館、一橋大学附属図書館史 昭和50 を参照されたい。)

(兵庫教育大学助教授)

『大学図書館研究』18号より転載